COSMOS集

「あすなろ集」特選

冬の校庭

高橋　梨穂子＊新潟

ハロー、ニューワールド　宇宙へゆく船の軌道は一種の産道だろう
この夜も一家を守れ雷の音に震える古いアパート
爪に塗るグレイッシュブルーゆるされてきたことばかりが記憶を占める
さかさまに絵本をひらくちいさな手さかさまになるめでたしめでたし
目も鼻もないけどきっといくつかはオラフなんだろう冬の校庭

バラバラの寿司

清水　佑太郎＊東京

冬の夜は犬をベッドに乗せておき温まったらわしが寝るのだ
繰り返す日々ゆっくりとかりかりと残りの命掠め取られる
中学受験生の面接して思う挨拶できたらいいんだけどな
入試の日採点終わり手洗いを入念にする午後七時半
差し入れを食べる時間などなくて自室で食べるバラバラの寿司

しづかな着地

前中　映　東京

島忠の長い通路の果てにある刃物売り場の棚のきらきら
金網を抜けて伸びゐし草の穂も斬首のごとく刈られゆきたり
刈られたらまた芽を出せばいいのだと堤の草は言はなかつたが
みづからの影に吸はれてゆくやうな秋の羽蟻のしづかな着地
川風に銀の羽毛を撒きながらゆふべ鴉が食つてゐる鳩

まりも食堂

高橋　美羽子　神奈川

五叉路にて小学生が友だちを待つてゐる昔の私のやうに
小学生の頃からこの道沿ひにあるまりも食堂に入りしことなし
歩くこと数へることも伝へるのも全て遊びの保育園児たち
バス道より石段降りて川沿ひの道を歩めば空気が変はる
一生に歌集を持たぬ歌人あり我が師でありし宮田信次も

落ち葉の音

印出　美由紀　神奈川

自覚なき聴力低下を知らされぬ落ち葉の音が聞こえてゐるのに
真つ暗な窓に映れるパソコンの起動画面の真青なる海
アフリカの巨き陸塊の深奥に「海の水」とふ宝石眠る
ジンバブエのアクアマリンの鉱山を村の女が鶴嘴で掘る
原石の鈍き土色掲げ上ぐる女の黒き肌がやく

駅までの道

荒川　ゆみ子　東京

日曜の大河ドラマのうらで見るポツンと一軒家にくらす人
真つ白な山羊のチーズを試したりハイジの小屋が見える気がして
雪雲がそこまで来てる　息浅く都会の谷の底ひにをりぬ
つきあひの良いその人の若くない妻はひと日を無口に過ごす
雪降ればニット帽の人増えておとぎの国なり駅までの道

大根を引く　内藤丈子　福井

春あさき越前岬に降り立てば夕陽に染まる母の横顔
雪のなか氷柱の吠えてゐる朝に長靴はきて大根を引く
我が歌を書き初めに書く母のため短冊買ひに雪の中ゆく
雪晴れに尉鶲きて越前の枯野明るむ野鳥レストラン
粥を待つ老い母のため菘（すずな）摘む雪明りする新年の朝

ツクヨミ　永田恵美　福岡

ひらがなの「し」の字のやうな滑り台の「し」の字の窪に夕陽がたまる
手の中のパセリを小さな森にして至上者のごと水に沈める
シャッターの閉まる店舗の並びたる廃市の冬の駅に降り立つ
帰省から戻る一人のバスの旅夕陽が友のごとく追ひくる
スサノオやアマテラスよりツクヨミになりたいこんな満月の夜は

半分こ　石塚恵子　香川

雲厚く初日はしばし遅れさう雑煮炊きつつ窓に確かむ
抽斗の張子の虎は十二年前のお年玉切手八十円
いつよりか姑は何でも半分こ鯛のおもて身今日はわれにと
〈かにわし〉のタルト10ピースをホールにし姑とわれとの誕生日会
われは幸せあんたが居るけん後どうする？呟く姑とグラスを磨く

キャメルスピン　川越三紀子＊宮崎

みどりごの喃語と母の笑い声朝の陽の射す宿のレストラン
屋外のスケートリンクではにかんで少女は回るキャメルスピンを
鮮明になりゆく月と沈みゆく夕陽を見ながら家路を急ぐ
ジョウビタキ剪定枝の上飛び渡る木の葉を遊びに誘うがごとく
搗きたての餅をあちちと千切りたる姉さん被りの祖母の赤き頬

卒寿の母　高木裕子＊神奈川

重箱におせち詰めつつ思いたり施設に暮らす卒寿の母を
電話口で元気ですかと叫んでも耳遠き母は返事もできぬ
キャスターが年の始めの挨拶し昨日のニュースはもう初昔
亡き祖母の雑煮の味を継ぐ吾は鮎の干物でおだしをとりぬ
年明けは暮れの忙しさの身疲れに猫のごとくいるガスストーブの前

郵便屋さん　落合美代子　香川

とりたてて言ふべきことの無きひと世澱むところはめかくしにせむ
やうやくに雨のあがつた庭先で短距離走を犬くりかへす
来年もよろしくと言ひわが犬の頭撫でたり郵便屋さん
寒空を池の水面に群るる鴨Z（ゼット）にもまたΩ（オメガ）にも見ゆ
スーパーの軒先借りた焼き鳥屋暴力的な匂ひと煙

黙黙黙　高瀬満由美＊兵庫

卵焼きねじりこんにゃく蒲鉾を御三家という我が家のおせち
明日の朝雪降り積もると我が夫はシャベルを洗いピカピカにする
雪かきにシャベル準備のまめな夫敦賀生まれの習性なりぬ
紅葉焼き酒の燗とは風流な真似てみたいな白居易の世界
コロナ禍の修学旅行は黙黙黙枕投げなどとんでもないらし

総代の夫　大津慧美子　大分

友の描く絵暦睦月は千両の紅と橙豊かに実る

新年の午前零時に御社へ総代の夫着脹れて出る
ほめくるる夫ゐる内は拵へむ黒豆、きんとん、数の子、昆布巻
〈初嵐〉ことしは花芽多につき睦月の庭にホホホと開く
グラウンドゴルフ終へてスコアを見てをれば夫は差し出すアイスのパルムを

汝の羽毛

奥永敬子　三重

赤き実をびつしり付けるピラカンサ好きになれない疲れてしまふ
会話終へ誰か判らぬと夫言ひぬ老いたる故かマスクの所為か
米作り止めて七年取り置きし藁の三束どんどに出しぬ
雪の舞ふ日にも来たれる雀二羽汝の羽毛は暖かなりや
眠りたるめだかの鉢の薄氷にはつか陽の射し氷のひだ見ゆ

冬の公園

石川妙子　群馬

女の子のみ育てし吾はとまどひぬ寡黙な男孫の語は「いや」「べつに」
頬をうつ赤城おろしが止みしけふ幼の声が広がる公園
二年ぶりに会ひたる孫の顔は似る男の児は父に女の児は母にと
二年前の「おばけごっこ」はもう卒業「人生ゲーム」で孫らは遊ぶ
ネクタイをきりりと結びて座りたる師の居ぬ初の歌会は寂し

プライド

中居久子＊岩手

岸壁でたき火を回む漁師らは年々狭まる漁場を嘆く
亡き夫の遺しし荷より出で来たる鮑の釣具に思いを馳せる
命綱を腰に結わえて「十海草」刈りしぶき冷たい早春の海
作業着で写りたくなく後ろ向く時折顔出す小さなプライド
浜仕事にプライド持てなく過ごす日々海より授かる恵み多きに
みすゞの詩「みんなちがってみんないい」しみじみ味わう雪の降る夜

胃検診

丸山克介　鹿児島

「男ひとりで料理できるの」と失敬な飯・汁・鍋物ちよちよいと出来る
あの世にて歓迎パーティーしてゐるや笑顔残して寂聴逝きぬ
「はい左へ、一回転して次右へ」目を回しつつ胃検診つづく
だらだらんセーター尻にぶら下げて男が市電に揺られてゐたり
川風に遊び疲れし凧一つ土手に倒れて引けど動かず

寅年

山野いづみ　鳥取

をととしの雪に裂けたる酸橘の木まがりし幹の枝に実あまた
コロナ禍の二年目無事に越えたねえ湯船の柚子と語る大歳
がん術後三年半の夫と屠蘇を酌み交はしたり雪のあしたを
車庫前の二十センチの新雪を掻きて汗かく初仕事なり
勇猛な姿なる虎ほんたうは臆病らしい　夫は寅年

怒をすてて

沢田弘子　奈良

民間の宇宙旅行が始まりて今年の漢字意味のある「金」
億円で宇宙旅行をする人とスーパーレジに並ぶわたくし
真つ白の短パン穿ける女子高生立ちこぎしつつ坂登りゆく
歳重ね喜怒哀楽の怒をすてて喜楽に生きむ令和四年を
歌会の会館前に集ひたる振袖姿のはるめく二十歳

靴に鳴る

橋本武則＊大阪

ふかぶかと差し込む光やわらかく朝餉明るし冬至近づく
早朝の冷気を吸えば新たなるひと日始まる寒椿咲く
寒冷の晨（あした）おもては霜白く薄氷靴に鳴るを踏みしむ

まなぶたの皺の深まり極立ちて能の翁の面に似るかも
人・車・光あふれる夜の街に天心の月静かなりけり

賀状三通　安井喜代子＊愛知

夜に入り呻きに似たるつよき風老いの独り居ますます寂し
手作りの御節つまみつつ屠蘇をのむ六十越えし息子と吾と
川土手のなずな・はこべら摘みし日の故郷うかぶ今日は七草
仁王像のごとくふんばり冬空に銀杏の古木はいかめしく立つ
送りたる賀状三通もどりこしいづくに行きし宛名の三人（みたり）

杖を抱へて　杉沢千恵　東京

しののめの染まりて初日昇るとき杖を抱へて両手を合はす
平穏の世に戻れるを祈りつつ大き初日にただ手を合はす
元旦の空は真青に澄みわたり富士は朝日を受けて染まりぬ
松飾り床の生花も片付けて七草がゆを独り味はふ
乾坤の境も分かず雪しまく秋田湯沢に友は住みつぐ

長き睫　中西きく子　東京

二人子が一部と二部の時間差に家族と訪ひ来ぬコロナの年始
かたくなに灰色の紙えらびたる児は塵取を折りて帰れり
ぎこちなく塵取折りゐし六歳の長き睫を思ひ出す朝
差し下駄の歯の間の雪を落しつつ通ひし学舎　門鎖されたり
すべりゆく風は春呼ぶ見下ろしの屋根に消残るはだら雪の上（へ）
老いし目の力を思ふ顔半分マスクで覆ひ会話するとき

「その二集」特選

もういない窓　岩舘澄江＊東京

除夜の鐘ならすぞというそのときの参拝客のしずかな呼吸
除夜の鐘ちからいっぱいなり響きみなの煩悩ふっ飛ばしてく
実家とはキケンなところもどりたくない自分へともどってしまう
家を出るわたしをいつも見送ってくれてた犬がもういない窓
韓国語きこえるだけでもはやその声が誰でも胸のときめく

ピンで前髪　金子英子＊新潟

ファッションは個性の時代男性がピンで前髪留めてレジ打つ
クリスマスイブの予定を尋ねても答えずに去る十九の息子
轟音が近づく林の向こうからSL現れ汽笛を鳴らす
すっきりと伸びた青竹頼りなく見せて聳える袋田の崖
突然に高速道路の雪止みて新潟市街の灯り近づく

朝のバス停

大池アザミ＊兵庫

留年と単身赴任終了し家にやかんが一気に増える
落ちている軍手が指をくねらせて包んでいた手はどこへ行ったか
ありがたく思える今日の曇り空饒舌だけが武器だった人
片足をたゆませて立つ誰からも見られていない朝のバス停
堂々とわがままばかり言い募る次女よ貴女がとてもまぶしい

白き闇

成田裕子＊青森

吹雪去り下界は白き闇となりブルーグレイの空に月出ず
つれなさに魅かれる私刺すほどの冷気と雪も嫌いじゃなくて
標識もミラーも真白道の端も見えぬまま行く真冬の道を
雪掻きの後は言葉も無くなってただ炭酸の音聞く二人
豪雪に耐えたご褒美雪景色と二人無言で啜るコーヒー

言葉の力

芝崎千鶴＊和歌山

孫四人それぞれ性格ちがいあり娘らは子育ての難しさ言う
朝ドラの岡山弁のなつかしく恩師級友の顔うかびおり
熟れすぎた蜜柑を枝にさして待つ庭に来る鳥めじろ・ひよどり
韓国（からくに）の人らの心も打つという茨木のり子の言葉の力
松の間の空気感じつつテレビ見る歌会始を背すじのばして
モディリアーニ吾に教えてくれし子は美大へ進みデザイナーとなる

ワイン湯

福本郁子＊京都

惜しみなく赤を放ちて冬に咲くポインセチアは街を灯せり
冬至の日ふろやに来ればなんとまあ柚子湯ではなく赤きワイン湯
里芋と蓮根牛蒡それぞれにまとう土の香個性を持てり
ふわふわと生まれたばかりの雪が降る何かが終わり始まる予感
にい年の風に押されて老い人も神社への坂登る元日
異界へと通じるような路地を抜けうたの書房の《泥》に着きたり

柚子七つ

松岡綾子香川

湯に浮かぶ鬼ゆずぎゅつと搾る度ゆらゆらゆらと冬至が香る
柚子七つ湯の中のんきに浮かびをり君の頭にみたててつつく
「うん、ええよ」昨年のゑがほを思ひ出す煮しめの味を見てくれし妣
友達にあん餅雑煮の写メ送るキッズ携帯操る九歳
息子たち孫のけんかを受け流す「たしなめよ」とは言へぬ距離感

五歳

春野直子＊熊本

二年ぶり家族そろって新年を迎えられたり女孫も増えて
なげやりな男の孫五歳を膝に抱き絵本の中へしばしいざなう
まんなかに生まれ出でたる性（さが）なるかことあるごとに不満な五歳
冴え冴えと冬晴れの朝ろうばいはひとつふたつと莟をほどく
うららかな冬日和なり街川に鴉は群れて水浴びをする

気遣いながら

人見江一＊神奈川

病室の窓より眺むる運河には走るゆりかもめ飛ぶユリカモメ
朝礼で話すあれこれ組み立てる始業のチャイム鳴り止むまでに
凍てついた道に撒かれた融雪剤踏めばプツプツ音立てる朝
嫌いではなかった脱脂粉乳が時を隔てて豚餌と知る
老人が老犬連れて道をゆく犬が主人を気遣いながら

海苔船　白井玲子　佐賀

南天とピラカンサスと黐の実が赤、赤、赤の冬の賑はひ
正月に氏神さまへ詣でたり越し来て今年二十五年目
海苔船は初日を待たず出航す航跡のこし有明海へ
浅草の下町育ちの美津子さん浜辺の町のマンションを買ふ
そろそろかメジロが姿見せる頃みかんの輪切り小枝に差せり

花徳浜　植田カズミ　鹿児島

掛け軸の虎の眼光、白き牙今年は気になる吾が干支なれば
寅年の令和四年の干支女われに三人（みたり）子、孫五人あり
花徳（けとく）浜しろき砂丘に黒々とマグマの便りの軽石届く
制服のスカートを寝敷きしヒダとりし吾の昭和も遠くなりたり
防寒の手立て知らざる幼き日〈風の子〉なりき今にし思ふ

夫は風待ち　山口育子＊東京

掃き寄せたいちょうの落ち葉二袋夕にはたまるまた二袋
一臼はお鏡三組五臼目はみなでほおばる　つきたての餅
切り口に鰊・鮭・肉のぞいてるお重にならぶ昆布巻きの顔
幼子は走りまわって凧あげる夫は風待ちじっとたたずむ
風とらえ糸くりだして凧揚げる孫とならんだ夫は少年

風の音雪の声　木田薫　富山

幾つかのやりたき事を残しゐる先の見え来し七十五歳
ひたすらに我が勤めきし仕事場の支店が一つ近々消ゆる
声もなく電車を降りる生徒たちコロナの中の吹雪く下校時
闇の中吹き抜けてゆく風の音寝床の中で聞く雪の声
昔日の記念写真に妻をりて四十九日は盛り上がりたり

記憶の廻路　小山由記子　新潟

内蔵のビデオの如く貯めてゐた記憶の廻路がプツプツ消える
古き映画観つつ諺よみがへり〝女三界に家無し〟腹立つ！
寝る前にひと口水を含む癖　末期の水を意識しながら
出会ひしは義父の書棚の「峠」なりき爾来司馬さんにぞつこん惚れて
ニッポンは世界で二位と喜べば何のことないプラゴミの量

ひよつとこの絵　吉弘藤枝　埼玉

ふくよかな水仙のつぼみ見付けたり新しき年の幸先のよし
願はくは百歳までも生きたしと人工股関節の脚リハビリす
夫を亡くしし我を励ます年賀状ひよつとこの絵に釣られて笑ふ
亡き友の歌集に旅の歌ありぬ共に行きにし佐渡を思へり
たんねんに育てたのです盗らないでと大根畑に立て札のあり